芦高の昔をしのぶ

初代校長を囲んで

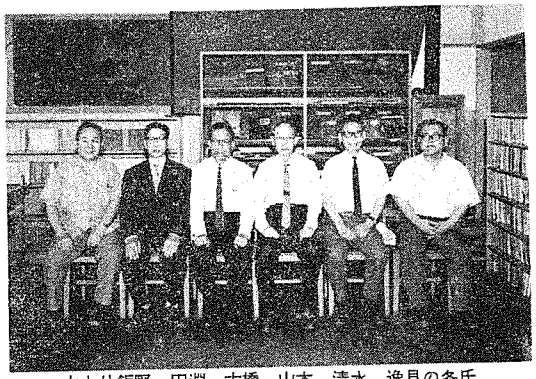
—座談会—

とき　昭和四十年八月一日（日）

ところ　芦高図書館

出席者

山本松市（初代校長）
飯野竹二郎（三代目校長）
清水敬治（四代目校長）
大橋茂樹（現校長）
神保永夫（旧職員）
金坂豊（旧職員）
福田政次郎（旧職員）
熊谷俊作（現職員）
田淵薫明（現育友会長）
逸見益一（同窓会長・一回生）
司会・川村淳一（現職員）



左より飯野、田淵、大橋、山本、清水、逸見の各氏

川村　ことしはちょうど芦高創立二十五周年ですが、同窓会では、かねがね総会の日に一度ぜひ初代校長の山本先生に来ていただこうと思っておりました。先生はなにぶん遠隔地におられますので、いままでお見えになれなかったわけですが、このたび特に同窓会からお願いしましたところ、ご多忙にもかかわらず、お仕事のご都合をつけていただいて、ここにきていただいたことは、同窓会としてひじょうな喜びであります。こういう機会はちょっとないことと思いますので、急ではありますが、山本先生を囲む座談会を計画し、先生がたにお集まり願った次第であります。では最初逸見会長からあいさつを。

逸見　本校もオギャーと生まれまして二十五年、そして同窓会も設立二十周年を迎えまして、やっとわれわれが成人式を迎えたわけです。ちょうど二十五年と申しますと、学校へ入って、大学を出

て、やっと社会に巣立った年頃であります。この二十五周年記念事業の一端として、こういう座談会を開くことも、きわめて有意義なことと思います。簡単ですがこれであいさつといたします。

川村　なおこの座談会はいま学校が計画しております「芦高二十五年史」のひとつの資料とするものですので、その点お含みの上、お話しいただきたいと思います。司会のほうでは、きょうの座談の内容として、はじめに山本先生からご在職当時の印象深かった思い出をご自由にお話し願いまして、その後、山本先生の時代は戦中の、芦高史においてはいわば神話の時代でありまして、とかく卒業生一般からも印象が薄いかと思われますので、山本先生についてのエピソードまたは思い出話を神保、金坂、福田先生の順にしていただき、その後、山本先生のために、山本先生後の芦高発展の跡をかいまみていただくという意味で、前校長先生がたに、できれば前の二十年史の座談会のお話と重複しないような学校経営上の印象深かった思い出を語っていただき、次に現在の芦高を語るということで大橋校長先生に、最後に未来の芦高がこうあってほしいという芦高の未来像を、ひとつ次元の高いところで、先生がたに描いていただければ、という計画でございます。では山本先生から当時の印象深かった思い出を。

山本　そうおっしゃっていただいてたいへん光栄なのですが、私の印象深かったことを話せとおっしゃっても、卒直にいって当時の芦中がなにもないところにできたので、毎日毎日、一年一年がすべて新らしい経験であり積立てでした。だいぶ年をとって忘れてしまいましたけれども、相当時間しゃべる材料は思い出すだろうと思います。なおいまのお話で、この前の記事と重複しないようにということですが、前のものも拝見したが、どの程度、どのようになっていたか、覚えていませんから、あるいは重複するかもしれません。実はこの間、きょうの会へ出るようにということで、逸見会長と川村君がわざわざ静岡までお出でくださって、それがなくても私、都合がつけば、一度体の動く間に古巣へうかがって、当時のかた、あるいはその後のかたと、できるだけお目にかかりたいとは思っていたのです。特にわざわざ静岡までも来ていただいたので、その好意に報いる意味からも、少々の無理をしても行かなきゃいけないという決心をしたわけで、幸いにして諸般のことが都合よくゆき、きょうおうかがいできることになり、こうやってみなさまにお目にかかれてたいへんうれしく思っています。

なんといってもいまのお話のように神話時代のような時であるし、特に日一日と戦争が本当の戦争になってゆく時代で、ちょうど打出の仮校舎にいた頃ですね、はじめてアメリカの飛行機が房総のあたりから日本を縦断した時期なんですから、いまからいえばきりのない思い出があります。くどくど申し上げてもなんですから簡単に、だいたいご存知とは思いますが、芦屋中学のできるにいたった当時のいきさつ、これは私県庁におりまして、書類を見たりなんかしていた関係もありまして、まずそのあたりからスタートします。これは当時の紀元二千六百年記念の事業として、芦屋で、当時の精道村で、近く市制をしこうという時で、ぜひ中等学校を作りたいという話が議員さんの集りで起った。当時地元は中学校なり女学校なり好きなようにお作りになる力はあったと思うんです。現にその後鳴尾村が中学校を作り、住吉村が女学校を作っている。しかし私がその時に聞いたのでは、作る金はなんとかする、しかしなにしろ未

開の地だから市立の学校を作ったのでは、まず入学の問題からその後の運営についてトラブルが起ってやれないだろう、とにかく市では自由にならない、ついては持参金百万円を県に寄付するから県立の中学校にしてほしい、これが最初の申入れだった。そこで県でも、それだけ地元が負担するなら県立学校の配置からいっても適当だろうというわけで、芦屋市立の学校ができるはずのところを、県立の学校にすることになった。その後百万円が出たか出ないかということは知らぬが、いろいろ曲折があったろうと思うが、当時はいま申し上げたようなことがはっきり表面に出ていて、これもその後どう処分されたか知らないけれども、芦屋の天神様の裏に一万坪程度の地所を買った。当時の職員諸君はご存知と思うが、われわれもなんどかその土地へ行って、いろいろの催しなどをやった覚えがある。当時芦屋天神の裏に、いまはなくなったかもしれぬが、池があって、下の山のほうからその池の線よりちょっと南へさがった所ぐらいまでの範囲を、将来の芦屋中学の敷地として市が買収してくださったわけです。そうすると、あれをなん段かの段に整地しなければ学校はできないというわけで、正式の設計はしなかったが、なんどか関係者が行って、どういう風にしたらよかろうと、いろいろ検討してみた。それともうひとつ、さてここに作るとすれば出入りの道を作らなくちゃならぬ、まさか芦屋天神をまわって行くというわけにはゆかぬ、それなら岩園の学校のほうから谷を登って斜めに行く自動車の通る程度の道を作らなくちゃならぬ、それぐらいまでの見当をつけていたのが当時のこと。

ところがだんだん世の中が妙になってきたものですから、そんなことは口で言うだけで、それどころじゃない、木造の校舎さえもできないかもしれないということで、当時私は大利市長さんや筏助役さんらとなんどか会って、どうしようかと相談した。その時誰かが知恵を出してくれたのが、岩園は看板をかけるためにひさしを借りたというだけで、芦屋には早晩第五小学校を作らにゃならぬのだから、それを理由にして建築の許可をとったらよかろうということだった。小学校はいくら非常時でもいやおうなしで、打出に第五小学校を作るということで書類を出し、資材の割当をもらって作った。その時小学校として使うつもりはなく、名目は第五小学校として作ったものを、当分の間芦屋中学の仮校舎として使うというわけであった。みなで机をかついで打出へ引っ越しをしたことはご承知のとおり。とにかく、この頃ますます日本がおかしくなってきた関係もあって、堂々と、最初の考えのような校舎に、でんとかまえるということは、夢物語のような状況になってきた。そして最後にはその仮校舎さえ焼けてしまったという。

この間同窓会長や川村君に会った時に質問されたのですが、私はもうそれほど問題じゃないと思っていたけれども、案外みなさんの頭に残ったらしいことは、第一回の生徒の入学考査の結果発表が予定の三時間も遅れたいきさつ。これは昼間に発表する予定が、午後のなん時だったか、夜になり、岩園の学校の南側に張り出したのですが、明りをつけなければ字が読めない、照明灯の手配もしてないので、あわてて外へ電気を出したりした不手ぎわのこと。これはまことに他意のないことで、当時県庁の学務課の若い役人二、三人を使って、やっかいな選抜の仕事をやっていたために、想像もしなかったほど時間がかかった。教育的な面での選抜の仕事は、確か一中、二中、三中からの応援三人だったかと、われわれ

とで、十人前後でやった。その人たちが書いて出してくれたレポートを比較検討して、最後的決定をしたわけだが、それまでの表づくりやその他のめんどうなことを、ぜんぜん学校のことをやったことのない県庁の役人にやらせた。学校の経験上、二時間ぐらいで片付くと思っていたが、彼らにやらせてみたらなかなかできない、選抜の仕事にかかるまでたいへん手間がかかった。選抜の仕事は、当時県のきめた方針に従って書類の上だけでやったから、造作なかったが。なお最後になって、これも手違いであったが、巻紙に書いて発表するのに、県庁で当時そういうものの字が書けるという某君に、二五〇人の番号と名前を書かせるのに、三時間もかかったですね。たいへんどうも不手ぎわな発表をしたものです。なにしろしろうとがやった事務上の手違いですが、当時だいぶん問題になったらしく、その後、私もいろいろ聞きましたよ、寄付した人を入れたとか、特殊な人をあとから拾い上げたそうだとかね。そんなことをする暇もなにもありゃせん。全く型のとおりやるだけで精いっぱいだった。

これに関連して私が困ったと思ったのは、入学式後、教科書や学用品を学校で売ったときのこと。この時ものすごく混雑したが、それも非難されました。私もぶつかってみて、これならもっと手配しておくべきだったと思ったが、あの混乱になってからはどうしようもなかった。みなさん押しあいへしあい、窓口で金を払っては本を買ったりしていったんですがね。まあこんなことがいわば生みの悩みみたいなもので、形のないところにできた手違いでしょうか。

岩園の仮校舎の生活を始めてから、校長以下ほんのひとにぎりほどしか教師はいないし、校長室もなし、みないっしょにいてやっていたから、内部では特に会議だなんて開かなくても年中会議をしているようなかっこうで、意思の疏通もできるし、誰かが思いついてありゃこうしたらいいといえば、すぐそうしようと決めるというぐあいだった。そのときに、これは当時の子供たちにどう受け取られたかと思っているが、通学の道路を決めたんです。これこれ方面からくる生徒は、これこれの道を通って、どこそこから、学校にくるというふうに、三通りか四通り道を決めたんです。この理由がよくわかってないだろうと思います。その最も重要な理由は生徒がいじめられてしょうがなかったということ。なにしろ一年生しかいないし、そのかわいらしい一年生が、授業の関係もあって、小学校のショート・パンツのままで登校している。中学生の帽子をかぶっているが、全く小学生と同じだな。そのために生徒はあのへんでちんびらどもにずいぶんいじめられた。ひどいのはバンドの金具でなぐられたり、虚を突かれてこづかい銭を取られたりした。だいたい芦屋の生徒はひ弱いだろう、良家のおぼっちゃんばかりだろうというので、甘くみられた関係もあったのでしょう。そこで生徒たちに単独行動をなるべくさせないよう、三人なり五人なりいっしょに登校下校させるよう、外敵に備えるために、道を決めたわけです。なお当時は昼休みには生徒たちは自由にあのへんの山に行っていたが、生徒が腕時計を引ったくられるということが起った。なんだかあんちゃんのようなのがきて、いまなん時だというから、時計を見て答えたら、出した手をきつくとって、時計をよこせといって持って行った。そういうことに物騒なことがあって、私ども教員としては生徒を守るための対策を相談しました。あまり名案は出なかったが。当時の生徒たちはどう受け取っていたか、なんだか窮屈なことを

をいうように思っていたかもしれん。そのうちだんだん生徒の数もふえてきたし、あまり外的な害を受けるということもなくなった。

当時の岩園小学校の今田校長はひじょうに理解がありまして、中学側のためできるだけの便宜をはかってくださった。しかし、校庭でもなんでも自由に使うといっても、なにしろ多数の小学生に対して少数の中学生であってみれば、小学校側が被害者になるというので、われわれのほうも少なからず遠慮しながらやっていた。士気を鼓舞するために運動会をやろうといっても、小学校の校庭では狭くてなにもできないというので、思いついたのが西宮の運動場ですね。三年目だったか、そこを借りて第一回の運動会をやって父兄にも来てもらったことを覚えております。その時すべての道具は学校から荷車で持って行き、設営をやり、運動会をやって、しまいにはまたそれをがらがら引っぱって帰ってくるというわけで、まるで夜店の商人が店を出すようなことをやった。学校も内容的には整っていなかったが、これが多少とも催しものでもやろうかという気分になったはじめですね。

当時、私もなお校歌を作ったり、いろいろ学校らしいこともしたいと思って、多少みなさんと相談しましたが、急激に世の中の状況が変ってきたもんですから、あまり浮いたことを言っているわけにはゆかぬ、むしろ身体でも鍛えておいてやろうというんで、そのひとつとしてやったのが打出の浜での水泳訓練だったんだな。仮校舎にきてみると海がすぐ近くだ、あれならふんどしのままで行けるというんで、学校でみな裸にして、ぞろぞろ歩いて行ったですね。当時県庁に行って、なんとか理屈をつけて手続をしたら、砂糖を配給してもらったので、泳いだあとで砂糖湯を飲ませた。これは私、むかし遠泳をやったあとで、あめ湯を飲まされたことを思い出して、泳いだあとは甘い物が必要だと思ったから。

年々先生の数もふえてきて、学校も三年目ぐらいにはかっこうがついてきたが、内部的にはいろいろな悩みがあった。学校経営上の予算面では、県庁にいた関係もあって、また創立校ということもあって、当時の県立学校としては最大限に融通してもらったが、それでもいろいろ特殊な整備をするため、父兄のかたから援助をいただいた。まあこんなことが神話時代の、創立当初の頃のことで、いまから思えばたよりないものでした。

川村　それでは、はじめに申しましたように、山本先生についての思い出またはエピソードのようなものをお伺いしたいと思います。なお、いま先生がおっしゃったことに補足的なことを加えていただいてもけっこうです。神保先生から。

神保　私がはじめて山本先生にお会いしたのは、芦中転任の命を受けて、先生に指示をあおぎに県庁へ行ったときです。べつにこれという仕事もないが、まあ中学の教科書として献本が学務課の一隅に積んであるから、さしあたりそれを持って行って、いろいろ検討してみるように、というお話でした。開校当時は校長先生のほかに先生が六人だけで、先生の数が足りず、生徒を六甲山や芦屋の山、天神裏の予定地へ連れて行ったりすることがよくありました。また、岩園校の前の川岸にちょっとした平らな所があり、そこですもう大会をしたり、飛行機のモデルを作って、その競走をさせたことも覚えております。芦屋の生徒はぼっちゃんばかりで気力が乏しいんじゃないかと思っておりましたが、ある時、二人の生徒が、あの川原で、裸で血を流してけんかをしているのを見まして、私はこり

やちょっとやるな、そうぼっちゃんでもないわ、やらしゃだいぶ男らしいことやるな、と半面では喜んどったようなわけです。新らしく先生方をお迎えした頃の記録として、写真が確か二枚ぐらいあったと思いますが、その写真は写りが良いので、私なにかの資料として提供したことがあります。それが山本先生のカメラによって写されたものであります。先生はその方面においても良いお手並みを持っていらっしゃいました。兵庫県立芦屋中学校という門標、これは私持ち合わせておりませんが、あれも山本先生がおとりになったはずです。記録として残る物を除きましても、私たちは時々写真の中におさめていただきました。当時私たちは職員室にちょっとついたてを立てまして、そこに山本先生がおられ、私たちはついたてのこちら側に陣取っておりましたが、先生は教育以外にいろいろおもしろい話を聞かせてくださることもありました。校長さんといっしょにいるからといって、なにも窮屈な感じはいだきませんで、みなが張り切って生徒を鍛えあげることを研究しておりました。井田先生というひじょうにテストの好きな英語の先生がおられまして、一学期に、多い時には、十四・五回から十七・八回もやられた。その先生に負けるといけないと思って、私も競争のようにしてテストをしましたが、私のほうが二・三回少なかったように思います。当時は私たちは若くもありましたし、やり方が殺伐で、生徒にはあまり良い印象を与えなかっただろうと思っておりましたが、変なもので、その後、手ひどい扱いをした生徒諸君ほど、あれが良かったんだと言ってくれますので、少しばかり安心いたしております。

金坂　私が赴任して最初に感じましたことは、校長先生が実にスマートだということでした。いまでもひじょうにスマートでいらっしゃるが、本当に英国紳士的なスマートさ、これが一番印象に残っています。いま神保先生からお話もあったように、カメラがお得意で、毎年一回は必ず全職員が先生にうつしていただいて、それがいまだにアルバムに残っておりますが……

山本　生徒の顔を覚えるために、クラスごとに、担任の先生といっしょにとった覚えはある。各組のをみんなとった。

金坂　職員だけでも一年に一回はうつしていただいております。最初のは確か岩園の自動車道路に面した出入口の所でとったものです。なお道路を隔てて川のむこうに、住宅地にするための三段になった広場がありましたが、まだ若かった私らも生徒諸君といっしょに野球をやった思い出がひじょうに楽しく残っています。校長先生は当時それを見ながら片すみでゴルフをやっていらっしゃったのを、私たいへん印象深く覚えております。まだいまのようにゴルフ熱の盛んな時でないんですから、ゴルフをやっていらっしゃるのがたいへん珍しい感じがしました。これも校長先生がたいへんスマートだったひとつの例証になると思います。いまゴルフ場をやっていらっしゃるのもなにかの不思議な因縁じゃないかと思うのです。それからいま神保先生のお話にも出ました井田先生の試験のお好きだったこと、これが私にも移りまして、私も試験が好きになり、よく教室へ出るのにポケットに半紙四つ切りにした紙を入れて、不意試験をやりました。ちょっと乱暴な話ですが、勉強をやってこないとチョークで頭に丸を書いて、最後にこつんとやるんです。そうした思い出が卒業後はなつかしいとみえまして、卒業生諸君に会うといつもその話が出ます。三回生から七回生あたりまでがこれを盛んにいいますね。一回生の諸君は確か一年だけ教えてすぐに二回生へ移

ったので、被害が割合少なかったんじゃないかと思います。さきほど校長先生や神保先生がおっしゃっていましたように、先生の数も少なく、校長先生も同じ部屋におられたので、人の和という点では本当に申し分なかったと思います。それになかなか変った痛快な先生が多かったようで、みな創業の意欲にもえていたというか、その点がいまひじょうになつかしく思われます。

福田　校長先生はたいへん温厚な紳士でいらっしゃったが、先生がたの教育はたいへんきびしかったですね。授業がすんで職員室に帰ってみると、たいていなん人かの生徒が職員室に引っぱられてきており、いい音もよく聞かれた。このあたり校長先生のやり方と先生がたのやり方とがうまくマッチしていたと思います。先生がただけでなく生徒諸君も創立の意気にもえておりましたが、校長先生のお人柄、お考えがうまく出ていたんだといまもって感じております。先生のゴルフのことですが、打出では放課後遅く先生が運動場でクラブをふっておられるのをなんべんも見ました。中学校の校長さんでゴルフをなさるのを見たのははじめてでした。山本先生のご温情には私個人として多くの思い出があります。芦中にお世話になる話が決ってから実際に赴任するまで十一ヵ月もの間お待ちいただいたこと。西宮での運動会の日にたまたま仙台で日本動物学会の総会が開かれることになり、先生がたの手が足りないにもかかわらず、無理な出張を許可していただいたこと。理科の設備に必要と思う物は全部買ってもらったこと。これは授業にも一部使いましたが、多くのものは箱に入れたまま倉庫――打出の校舎で便所を倉庫にしました――にしまっておきました。それが終戦前の空襲で全部焼け、あれだけの設備、ほんとに惜しいことをしたと思います。ともかくそういう整備の面については、県からどんどん金を引き出していただいていたと思い、ありがたく思っております。

川村　以上で山本先生の時代を終え、これから山本先生後の校長先生がたの時代に入るわけですが、阪部先生と前川先生がお見えになっておられませんので、突然で恐縮ですが、阪部先生と前川先生の時代を、それぞれ、福田先生と熊谷先生にお願いしたいと思います。それでは福田先生、飯野先生、清水先生、熊谷先生の順にどうぞ。

福田　阪部先生の時代は昭和十八年四月から昭和二十六年三月までの八年間でした。戦争の激しい時から戦後のまだ混乱期ですね。戦争が激しくなった頃、毎月のように、飛行予科練などへ出す生徒の割当があったらしく、当時阪部先生のご苦心はそこにあったように思います。予科練へ行けというのは、いわば、死ねということですから。クラス担任をしていた私たちも、自分のクラスの生徒に、われと思わん者は出てほしいと言ったわけですが、それが一番つらいことだったと思います。しかし芦中の学徒出陣者が全員無事復員したことは幸いでした。打出の仮校舎は、戦争末期に学校工場となり、低学年の勤労作業場となり、さらに空襲で全焼したわけですが、校舎焼失のあとしまつに続く苦しい放浪生活の間、阪部先生のご苦労はなみなみならぬものがありました。戦後、宮川小学校、海技専門学校、本山第一・第二小学校などを順次借用しての放浪生活も、小学生が疎開先からだんだん帰ってきたために追い出され、わずか八教室しかない雨漏りのひどい芦屋青年学校のぼろ校舎で、放浪最後の生活を始め、空前絶後の三部授業をやったことは忘れられない思い出です。この頃新制高校のことがだんだんと取り上げら

れ、校舎、運動場などの施設のない学校は廃校になるという風評が流布されました。毎夜、疲れたお体で、市会議員の私宅を順次訪問され、芦屋高校の必要性を説明され、市内の小学校を芦高のために譲り渡していただきたいと懇請し続けておられた阪部先生のお姿が、いまでも脳裏に強く浮んできます。なお育友会、当時の父兄会が相当強力に働いたことも見のがせない。芦屋高等学校完成期成同盟が結成されたのはこの頃のことです。芦屋市在住の名士が名を連ねていた。こうして昭和二十二年二月、市会で宮川小学校をもらい受けることが決議されました。しかし同年十月現校舎へ移転を完了するまでにいろいろ問題がありました。施設として理科教室がない、運動場が狭い、学校移転のための最低基準が満たされていないということで、阪部先生のご苦労が続いたわけです。理科教室は県・市のご努力で応急のものが造られましたが、終戦直後のものでまことにお粗末であり、しかも未完成のまま業者が逃げ出したいわく付きの建物でした。運動場は市の計画である緑地帯（現在の大運動場）を共用させてもらうことにしたが、それでも狭く、テニス・コートなどはとれない。そこで阪神電車の北側の小公園とその東の市営住宅の土地を育友会で購入していただき、これと現在体育館が建てられている当時の市有地とを交換してもらい、やっと形だけは整えました。もちろんこれらの運動場は焼跡で、かわらや小石が山積しており、バラックの家が建っていて人も住んでいた。次に備品などの設備を整えること。全焼で設備は全くない。しかし育友会のお世話で生徒机もぼつぼつ整備され、また県が芦中の設備を整えるために七〇〇万円近い公債を発行してくれました。そこまでの県、育友会、学校の苦心は並大抵のことではなかったと思います。その債券は、役員のご努力で、一括して神戸銀行が引き受けてくれましたので、短期間で備品がどんどん整ってゆきました。二十二年夏、育友会総会が二回ほど、当時集まる所がないので現在の仏教会館で、開かれたことを覚えております。運動場の整備促進については、生徒から阪部校長に強い要望がなされたが、焼跡の片付けだけでも大変なのに、戦災者が一部住んでおり、更に恐らく資金も苦しかったことと思いますが、暇がかかりました。この間、資金面で役員のかたのご援助の大きかったことも聞いております。こういう状況の中で、野球部が昭和二十一年以来、しばしば甲子園で大活躍をしたことは、ひじょうな感激であったわけです。

飯野　ちょうど山本校長さんが県の視学をしておられた頃、私、中学校長で、山本さんにはいろいろご指導いただき、ご懇意に願っておりました。さきほども金坂君がおっしゃったように、県の学務課にはまことに不似合いなスマートなかたで、まず第一にパイプをくわえておられる。あの時分はパイプというものがひじょうに珍しい時代でね。また全体の風采がなんとなくあかぬけしてる。英文学者というものは、こういうあかぬけしたかっこうでいるのかなあ、という印象を受けたのですが、話しているとまたまことにあかぬけしている。いろいろお話をうかがったけれども、いや味がなく、気にさわるようなことをいちどもうかがったことがない。県庁でもそういう、まことになんといいますか……。

山本　県庁じゃぼくの先輩だからね。

飯野　いやいや、こっちはもう監督されるほうで…。それから、昭和十六年、芦屋中学校ができた翌年の二月十三日の日付で、四中をこしらえろというわけで、竜野から辞令をもらってめんくらっちゃったんです。建物もなにもないのに、困ります、と学務部長にいうと、文部省に書類を出しちゃった、いやならやめろ、もうおまえのあとは決まっとるんだと言われる。ところが私一人任命されたので、校長兼小使兼…でどうしてよいかわからん、とにかく先輩の山本さんに知恵をかりようと思って芦中へ行った。芦屋だからおぼっちゃん学校で、例によって山本式にスマートにやっているだろうが、そのまねはできなくても、なにか学ぶことがあるだろうと思ったわけです。朝でしたが、職員室で職員朝礼のようなものをやりましたよ。先生がたがいっしょに集まって、なにか、あまり堅苦しいものじゃないが、打ち合わせみたいなもので、こりゃちょっと空気が違うぞという印象を受けた。生徒の状況を見ると、半ズボンで、相当手きびしくやられており、私の予想と違う感じを受けた。その後三代目校長としてお世話になるようになって、その不思議な因縁に驚いたわけです。別に申し上げるようなこともないんですが、きょうもこちらへくる途中、右側にプール、体育館、左側にテニス・コート、さらに校舎と運動場の境が――ぼくらの時分には道路があって、市民の通路だ、ふさいだらいかん、ということだった――きれいにふさがれていて、学園の専用になっている、ふじだなのあたりも、葉もろくに出ない木が植えてあったが、すっかり葉でおおわれて立派になっている、中に入ると立派な中館ができている、というわけで、当時とすっかり様子が変っており、学園という感じをびったり受けた。いまから考えると、われわれの時代のやろうとしたことは、みみっちいことだった。この図書館も、みみっちい図書館で話にならんようなものですが、当時高校では県下で一番先にできたもので、他校からうらやまれ、見学者がたくさんきたものです。しかしあとからできたものはみなこれより良いもので、まあ、はじめというものはみなそんなものですわ。それからさきほど福田君が言った理科教室、すなわち中校舎のことですが、どうにも使いものにならん、いつひっくりかえるかわからない、あぶなくてしょうがない。そこで、市に、創立当時の契約のことをお考えいただいて、なんとかこれを補強する金を出してくれと交渉しても、さっぱりらちがあかん。県にやっとお願いして予算を取り、改装したんです。化学教室なんか床をはいでみたら、私びっくりしたです。実験室の管は、床の下からみぞで受けて液体が流れるようになっているかというと、そうじゃない、そのまま下の砂へ入っている。いろいろな黒い薬品の汁やなにかがいっぱい出て、砂が真黒になっている。どないもこないもたれ流しですわ。とにかく排水の設備をしたり、実験の設備などを直したりして、化学教室や物理教室を実験室として使えるようにしたことで自己満足したんですが、みみっちいことでしたよ。いまは堂々とした四階建の建物ができてるんだから。しかしそれも、その時分では必要で、それなりに当時の生徒諸君の役に立った。とにかくそういう、いまからいえばばかばかしい、みみっちい努力もいろいろあって、現在まで成長したわけだ。学校も二十五年といえば一人前。なるほど一人前になったかっこうはまことに堂々としている。まあ、欲をいえばこの本館ですが、いまはちょっと改装もできそうにないが、そのうち四・五年たったら、いろいろの事情でその時が来ますよ。

清水　私、教育界におりましても、師範教育という点で、全国を駆け歩いていたものですから、山本先生に親しくお言葉をいただいたのもきょうがはじめてでございます。私が芦高にお世話になる時

ひじょうな希望をもったことは、初代校長さん以下の校長さんがた、先生がたのご努力、また第一回以下の卒業生各位の自重自愛により、良い環境のもとで、短日月のうちに驚くべき成長をとげ、一流の学校になっているということでありました。私は親しくその実態を見て、先生がたのご援助を得て経営したいという念にもえてやってきたわけです。きた時は飯野校長さんのあとで、ちょうど湯に入ったようで、ほとんどなすこともなく送ったように思います。ある日、三年生の諸君と話していると、「先生、芦高の自由はご承知ですか」という質問を受けまして、「さあ、よくは知らんけれど、きみらの思うこともやり、われわれの言うことも聞くのが自由だろうな」という話をしたのを覚えております。これということはないけれど、一人一人あるいは学年などで離れて事をやる時にはけっして間違いをしないという意味の良さをもっているのは、自由のひじょうに良い面じゃないか。たとえば修学旅行なんかやっても、いたる所で善行をやって帰ってくるという良さ。こりゃ、やはり、初代ならびに歴代の校長さんがたの薫陶よろしきを受けたんじゃないかと思いました。それから、これは男子諸君が聞いたら怒るだろうと思うが、ここへきて感心した最初の印象は、女子がひじょうに良いということだった。女子諸君は、このあたりの女性に私が接しなかったせいか、てきぱきとしているのに感心しました。いまでも、女子諸君は、いわば中性的(?)で、ひじょうに進歩的でいいなあ、という感じをもっております。けれど、それがいわゆる芦屋マダムなどというわついたのは別として、教育ママさんと言われるように成長してほしくはありません。学校の先生を横の過程観察的なゆきかただとすると、家庭の母は、生れ落ちた時から縦に居常観察を続けているのですから、その良さを子供に反映させねばなりません。それだのにまるで学校の先生のようになって、家庭を学校化する教育ママさんは感心しません。勉学のことは、どの校長さんもやかましく言われたことでしょうが、私もかなり口やかましかったほうです。当時の芦高は、確か、勉強でも運動でも阪神間ではどこにもひけをとらないで、第一位であったと思いますが、なかには某君などのように(父兄のかたにもありましたが)勉強にきたのではないと広言する者もあるし、予備校化すると嘆いた者もありましたが、これは芦高だけでなく、都市的な一般傾向でありますが、痛感したことは、勉強でも運動でもですが、驚くほどの熱心さで九分九厘まで築きあげながら、もうひとふんばりというところでがんばりがきかない。いわば九仞の功を一簣に欠くとでもいうか、いま一息という粘りがない。ひとつのことを徹底的にやってのける、とことんの手答えの持ち合わせがない。勉強の手答えは遊びの手答え、遊びのそれは勉強のそれであると思います。むかしは、いまでも地方へ行くと地理付図と寸分たがわぬ地図を目の前で書くという凝った生徒もいるし、くもや鳥の研究をして他の学科を顧みない不都合な(?)生徒もいます。こんなのはこの頃の都会の高校生にはいないように思います。いると困りますけれどね。とにかくきびしい勉強は人間形成の血となり肉となるものだと思います。「勉強の新選組」はどうかなといって、同僚から笑われたことも思い出しました。建築のことについては、飯野先生も苦労話をなさったが、私の時にはお話の図書館を増築したり、計画のあった生徒食堂を作ったりしました。それよりも建築における私の画期的な仕事としては中棟建築のことであります。飯野先生時代からたくわえてもらっていた建築資金を

よるべにして、その緒についたことは、別の意味で重大なことでありました。いまから思うと自慢になるのか、失敗になるのか、功罪相半ばするようで、気になることもあります。それは、芦屋高校の現校地が、計画公園の敷地でもある関係から、いっそのこと北辺の霊気漂う丘に移転地を物色したのでありますが、これという一万坪あまりの適当な候補地も見当たりませんでした。現地に鉄筋四階建のくいを打ちこむことは、芦高が永久にここに定着することを決めたことになるからです。私のあとを継がれた前川校長は大いに土木を起されたが、現地増改築の元凶(?)は私です。当時はなかったけれど、こんにち第二阪神国道の騒音の話を伝え聞きますと、なんだか悪いことをしたようで、ひどく責任を感じます。最後に、このめでたい二十五周年記念にあたって、同窓会が初代山本校長を迎えられ、山本先生また快くこれに応じてはるばるこの会に臨まれたことは、ほんとうに敬意を表するものであります。

熊谷　急にご指名を受けまして、前川先生の代弁といいますか、または先生ご在任の三年半を浮き彫りにするといいますか、これはなかなか私などにはむずかしいことでありますが、思いつくままに、それでは二、三お話しましょう。前川先生の時代のことで、まず第一にあげなければならないことは、なんといっても本校積年の課題である諸施設の整備が一挙に推進されたことであります。その詳細はこの机上にもあります芦高二十年史に「校長の手帳」として先生も記録を残されております。先生はあの堂々たる体格と太っ腹なご性格で、どんどん推進されたのでありました。中棟の完成は前校長清水先生のご事業の継続であり、校地の拡張(現在のテニス・コート)や体育館、プールの建設は飯野先生のとき始められた創立十五周年記念事業の完成でありました。このように前時代からの貯蓄と計画を受けつがれて、この事業の実施に前川先生があたられたことは、まことに先生は本校の良い時期に校長を勤められたといえましょう。ことに体育館の建設については、内部設備やお化粧などはあとからでもできることであるが、フロア(床)の広さだけはそれができないのであるから、できるだけ広く、ということで、このことについては県教委との間に幾分のくいちがいもあったようですが、急増期の現在ではそれが幸いして、これは卓見であったという見方もあるようです。テニス・コート、プール、体育館の完成は先生がご退任された年の秋のことでした。これらの継続事業のほかに先生のなさった大事業のひとつには、運動場の整地があります。これは運動場を全面的に掘り起したため、四月から九月まで約半年間、運動場を使用できなくて、生徒や父兄や職員から非難の声が出ましたが、予定どおり完成されました。この完成によって、運動場の傾斜も是正され、排水も良くなり、雨があがればすぐ運動場が使用できるということで、喜ばれているようであります。次に教育内容の面に触れますと、この時代も続いて衣笠先生が教頭であられたこともあって、清水先生時代の継続ということのほかは別にありませんが、前川先生個人のことについてはいろいろあります。先生は率先垂範ということをモットーとしておられたように思われます。ご着任早々に、職員室と事務室に赤ランプをつけられました。これが点灯されていると「学校長はいま校長室にいる」という合図でありました。長たるものは居所進退を明らかにすべきであるという信念からであったようです。現在もこれはそのまま使用されています。次に生徒の遅刻を防止するために、登校時に校門に黙って銅像のよ

うに立たれたこともありました。これには、出勤するわれわれもどうも威圧を感ずる、という職員の声も出ました。また、ちりかごとちり拾いを校長室の片すみに置かれて、校内のちり拾いをされたこともありました。それから、話がお好きで、じょうずであられて、たびたび全生徒に話をされました。漢文にご造詣が深く、よくこれを引用して話されましたし、ご専門の心理学をふまえて「笑い」について話されたことがありまして、いまも私の印象に残っております。ある年は年間週なん時間か授業をされましたが、これは特記すべきことです。最後に、芦高ご在任当時の先生のご心境の一端を表わすものとして、「ぼくが長田高校長になった時は、人はなんとも言ってくれなかったが、芦高に来た時は、『おまえはいい学校へ行ったなあ』と言ってくれた」と述懐されたことがありまして、県立高校長の最後の学校として、本校のご在任を日々喜んでおられたように思われます。

川村　山本先生後の芦高発展の思い出も現在にまいりました。大橋校長先生に芦高の現状を語っていただきます。

大橋　きょうは珍らしく初代の山本校長先生をはじめ、歴代の校長先生、また本校の発展のためご努力をいただいた諸先生にお出でいただき、いろいろの時代の思い出、ご苦心談を伺って、先生がたに敬意を表するとともに、感謝の念でいっぱいであります。私、着任しましてから、十五年史、二十年史を読みましたが、きょうのお話の中から、学校経営上の反省の資料とすべき点は十分取り入れまして、みなさんがたが築かれたこの学校をなんとかもりたててゆきたいと思っている次第です。着任しました昭和三十七年の十月に、第二阪神国道が開通し、その騒音問題に悩まされましたが、いろいろの悪条件により、第二運動場をこわし、パイプ教室を建てました。私、飯野校長時代に家庭科教室を見て感心しましたが、現在改築の必要があり、南館の改築工事にとりかかっております。会議室も、南館工事の進展に伴ない、解決するだろうし、図書館も新らしいものに改築したいと思っています。現在、一、七〇〇人あまりの生徒と、六〇人あまりの職員をかかえた大世帯の学校としましては、手狭の感があります。しかし施設の完備も大切ですが、現在の職員と卒業生が一体となった体制ができるということが、学校振興の基本であると思います。実は、これだけ世帯が大きくなりましたので、なんとかひとつ、全校の生徒、職員ならびにこの地域社会の人たちが、感激のうずに巻き込まれるというほどの、なにかひとつの成果があがる必要があるんじゃないかと思ったり、期待したりしておるわけです。ことしも野球あたりで、そういうことが起りはせぬかと期待していたのですが、残念でした。

川村　相当時間がたちましたが、またとない機会でございますので、最後に、芦高を去られた校長先生がたに、芦高のあるべき姿を卒直に描いていただきたいと思います。山本先生、飯野先生、清水先生の順にどうぞ。

山本　はじめに、これまで出たことで、一言補足しておきます。さきほど飯野校長から半ズボンのことが出ましたが、これは非難じゃなくておほめにあずかっているんだけれど、あれは、実は、戦時の資材不足、資源愛護のためなんです。当時配給の服をくれたが、桑の繊維だかのひどいものだった。三年になると軍事教練があって、長ズボンをはかなきゃならない。しかし二年まではその必要はなかろう。小学校六年までは半ズボンをはいているが、中学一年だ

から長ズボンをはかなきゃいけないというわけでもないし、二年までは小学校時代の古いものをはけるものははいたらいいじゃないか、というご都合主義もあったわけです。もちろん、しいて長くさせることもできたわけだが、中学に入って急におとなぶったかっこうにならなくてもいいじゃないか、むしろ童心を失わないで育てたほうがいいんじゃないか、という考えでした。将来の芦高ですが、あまり意識的に型を作るというのでなく、生徒の様子を見て、誇りを持ち、満足して生徒が巣立ってゆくような方向にご指導いただいたら、という気持がいたしますがね。私どもの頃、持って生れた能力を伸ばすという意味で、なにをやれといったことは言わず、どっちかへかたよるようなことは勧めなかった。必ずしも野球を強くしようという気持はなかった。私、静岡へ行きましてから、高体連の会長をやりまして、高等学校のスポーツ関係のことに相当深入りしましたが、ある種の私立の学校、たとえば名古屋の中京のごときは、野球を看板のようにして、意識的にスカウトのようなことをやっておられるところもある。しかし芦屋は野球だけじゃないんですから……。なおこういうことがありました。昭和二十四年、芦屋が野球で甲子園に出た時のことです。当時、私、県庁の部長をしておりましたが、たまたま静高の校長が欠けており、後任の校長が決まるまで、そこの校長事務取扱を半年ほどしたことがあります。その間、たまたま静高が県下で優勝して甲子園へ出場することになり、一応責任者としてついて行ったところ、たまたま二回戦で芦屋高校とぶつかっちゃって……。おまえ、どっちを応援するのか、なんていわれましてね……。

飯野　ぼくの五年間の印象から言えば、その後いろいろ修正もあったでしょうが、先生がたも生徒も、いわゆる芦高カラーというものを、そのまま大きく、時代に即して、伸ばしてゆけば、それで結構じゃないかと思うんです。ここでは校長が方向づけをする必要がなかった。先生がたが企画をし、お互に議論し、ちゃんと方向づけをして、自分でしっかりやってゆく。これほど良い学校は他にないと思う。現在でもそうだろうと思うが、こういう習慣はぜひ続けてもらいたいと思う。もちろんこれは校長になまけさせるという意味じゃない。それから、生徒がひじょうに朗らかで明るい。年寄りの目で見ると、ちょっとあぶないなということもあります。けれども、この学校の生徒は善意と良識をちゃんと持っている。だから、朗らかに、のびのびとやるということを、ぜひ失わないようにさせてほしい。これは他の学校のまねることのできない、芦高特有の良い点で、私、いままでの経験から、これを保証します。そうすれば生徒はしっかりやってゆきますよ。

清水　平凡なことであるが、生徒個人々々が努力、工夫し、先生がたも使命感にもえて努力、工夫するうちに、新らしく未来が開けてゆくと思うから、なおいっそうのご努力をお願いしたいと思います。服装という点では、モンテ・ペロでは小学校から自由で、けばけばしいようで、なかにはナイト・クラブなんかに出入りしたりする者もあって、むこうでも、もてあましているようですが、芦高も服装は自由ですが、伝統をなしていて、おのずから節度が守られているという良さがあり、ひとつの象徴的なことと思うんです。現代は変化している、進歩しているという人が多いが、それに処する道をほんとうは持っていない。そういう意味で、いままで芦高の良さの話がありましたが、欲をいえば、芦高が時代の先達として、こ

んご有形、無形に学生、大きく言えば社会を指導してゆく位置に立っていただきたいと希望する次第です。

川村　いま現育友会長の田淵さんがいらっしゃっていますが、田淵さんから一言ごあいさつをいただきたいと思います。

田淵　先生がたの熱心なご指導により、天下に芦屋高校ありという、伝統的な良い校風をお作りいただき、現校長大橋先生がまたそれをよく受けついで、芦高カラーをさらに豊かなものにしていただいておりますことを、ひじょうに感謝いたしております。これは歴代の校長先生をお助けになった先生がたのご協力も大いにあずかって力があったことと思い、感謝する次第です。このような名誉ある学校の育友会長という大それたものをお引き受けしておりますが、ほんとうになにもいたしておりません。ただ良きものをそこなわないようにと、それだけを考えております。

川村　まだまだ先生がたにお話をお伺いしたいのですが、予定の時間も相当超過しましたので、最後に逸見会長から閉会のことばを。

逸見　きょうは先生がたご多忙のところ、また酷暑のなかを、お出でくださり、貴重なお話を聞かせてくださいまして、ありがとうございます。母校の発展のため、先生がたのご努力とご支援を切望しますとともに、先生がたのご健康とご多幸をお祈りして、閉会の辞といたします。（拍手）